

熊野の
木林から



吐生(はぶ)の牛鬼(うしおに)は川に出たり、山上に横たわっていたという。かつて牛鬼も眺めたであろう山上からの眺望は素晴らしい。

の奥の吐生(はぶ)には牛鬼(うしおに)や河童(かっぱ)が悪さをしないように封じ

怪熊野

「串本の怪異(其の二)」

其の(三)

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

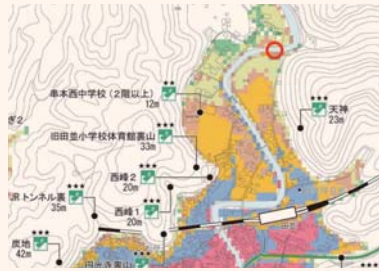


串本は、海辺に中心街や人口が集中しているため、海ばかりの町に思われがちだが、意外にも深い山を抱えている。海沿いから山に向け、谷ごとに道があり、その奥の山の中でも人々の暮らし

があり、そこにはいくつもの怪異の話が残されている。

たとも伝わる立派な宝篋印塔(ほうきょういんとう)が残されている。変化自在で、黒光りする巨大な身体を山上に横たえて笹を食べ、美しい鳥の姿となることもあった。牛鬼の姿を見たものは寝込んでしまい、二度と起き上がる事ができなくなるといふ。不気味な雄たけびを聞く人もいたりして、人々は気の休まる事がなかった。そこで周辺の有志が相談して、宝生寺の僧「仙石和尚」にお願いし「大乘妙典一切経」を石に刻んで土中に埋め、碑を建立した。正面には「大乘妙典一字一石乃塔」も文字が刻まれ、一般には雨乞いと五穀豊穡が祈願されているといわれるが、牛鬼封じの話も伝わっている。

田並には、河童(ゴツタレボウシ)が潜んでいたといわれる淵がある。山を挟んで東側の有田と穴つながつているともいわれた。ある時、淵の河童が淵の畔につながれていた馬を川に引きずり込もうとして、暴れた馬の手綱に腕が絡まってちぎ



田並の河童(ゴツタレボウシ)が潜んでいたと言われる付近(地図内の赤丸)は、大津波の際、津波が川を逆流する可能性があるエリアとなっている(串本町防災マップを改変)

れてしまった。河童は、馬の持ち主の家を訪問し、もう悪さはしないから腕を返してほしいと懇願する。馬主は、腕を返す条件として、この川が逆流するまで、いり豆から芽が出るまで、川岸のエノキの木の枝が向こう岸まで届くまでは里に現れないと約束させることを河童に提示する。河童は、腕を返してもらいたいため、無理な条件をのみ、二度と里に出ることができなくなったという内容だ。この話は、以前にも紹介した古座川の河童の話と似ており、紀中から紀南にかけての各地に同様の河童話が残っている。河童が潜んでいた田並の淵は今では浅くなってしまうと、もう河童は居ないだろうが、エノキの切り株は残っている。ところで、川の逆流の話であるが、海の近くでは津波の際に見られることがあり、ひょうとして大地震の際に河童が現れるかも知れない。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

